

右の「進歩的な学生」のなかに佐藤忠良氏（昭和十四年彫刻科卒）が居た。「美校時代を語るⅡ」（『杜』第五号。平成三年十二月、東京芸術大学美術学部同窓会）によると、氏は五、六人の仲間と或いはジツド、ヴァレリー、アランの著書、高村光太郎の『ロダンの言葉』などを讀んだり、或はロダンの弟子とかブールデルの弟子とかが来ると質問を試みたりし、いろいろな研究会を真面目にやっていたが、極く自然に社会主義や共産主義の国では芸術に対してどういう考え方をもっているのだろうかという疑問に行き当たり、文庫本の『唯物史観的芸術論』（正確な題は不明）を讀んだ。しかし、わからないことがいろいろあったため、代官山の同潤会アパートへ著者を訪ねて質問したりした。ところがその人が共産黨員だったらしく、大内兵衛らが逮捕された人民戦線の検挙の際に一緒に検挙され、氏ら本校生のことも明かすみに出て皆拘引された。氏自身は黨員でもなければ、そういうものに興味があったわけでもなかったが、卒業制作にとりかからねばならない十四年一月の十八日に練馬署に連行され、二月十八日まで拘留された。取り調べ中、唯物史観の書物について、「売っているのに読んで、何で悪いんですか？」と聞いたところ、刑事に「ひとりで読むのはいけど、皆で読むのはいけない」と言われたという。また、思想が悪いからこういう絵が好きなんだと言われてモディリアニの画集まで取り上げられたという。

昭和十三年十一月、大学や専門学校の学生自治運動グループの検挙が開始され、学園から左傾活動が一掃されつつあった。佐藤氏らの左傾活動とも言えないような行動まで阻止され、しかも一カ月も拘留されるような時代が到来したのである。

⑬ 東京美術学校同窓会

昭和十四年三月十日、本校卒業生の組織である東京美術学校同窓会が設立された。「今次事變」下にありて全国各地方に遍在せる卒業者と母校との間に於ける連絡緊密を要望する聲は、日に月に昂まりつゝあるの状態に鑑み」（『発刊の辞』会長芝田徹心『東京美術学校同窓会会報』第一巻第一号。昭和十五年三月）で設立されたのであった。会長は本校校長、事務所は本校内に置かれ、印刷用紙入手困難の折りから、翌十五年に上記の会報が創刊された。僅か十六ページの冊子で、編輯兼発行人は鎌倉芳太郎。内容は上記芝田会長の「発刊の辞」、応召会員氏名（百七名）、戦死者報告（十一名）、戦地通信、会員移動、東京美術学校創立当時回顧録（一）、土橋醇一著「戦乱の巴里を逃れて」、同窓会記事（会則、会費納入者名簿）から構成されている。同窓会の活動は本誌一冊を刊行したことを除いて不明である。

⑭ 教育振作

昭和十二年の日中戦争開始以後、臨戦体制確立の必要から国家総動員法が公布（翌十三年四月）され、また、文部省には教学局（同十二年七月設置）と教育審議会（同年十二月）が置かれ、思想、文化、教育の全面的統制が実施され始めた。これと関連して同十四年五月に本校は教育振作の具体的方策に関する報告書の提出を求められたが、その報告書の控えが現存するので、左に掲載する（一）は文部省の質問条項）。